

令和3年度入学試験問題（前期日程）

小 論 文

（中等教育教員養成課程）

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること。

〔1〕 つぎの文章は、柔道家の山口 香氏によるものである。これを読み、あとの問いに答えなさい。

現役を引退して、日本オリンピック委員会の在外研修制度でイギリスに一年間勉強に行かせてもらう機会を得た。このときの経験は指導者としての価値観を大きく変えるものだった。

所属したクラブで英語の勉強も兼ねて子どもたちのクラスを持った。まず驚いたのは、小さな子どもが私のことをファーストネームで呼ぶ。「ハイ！ カオリ。元気？調子はどうか？ 髪切ったの？ その髪型好きだよ」。また、何をするにも黙って言うことを聞くことはなく、「なんでこんなことやるの？」といちいち尋ねられる。日本の道場では、先生の「やれ」と言ったことに質問する子どもはほとんどなく、疑問を持つことすらしないのではないかと。大きなカルチャーショックだったが、郷に入れば郷に従えなので、つたない英語を総動員して丁寧に説明した。

初めのうちは外国の子どもは生意気で理屈っぽいと思ったが、指導を重ねていくうちに、学ぶということ、修得していくプロセスに、日本人とは違いがあるのだと気がついた。日本の柔道は型の文化なので、個性や自由は許されずに、まずは基本となる型を繰り返し学ぶ。学びながら型に込められた師の思いや考え方、生き方について稽^{かんが}えるのが稽古である。型を習得してはじめて、その上に自分の個性を重ねていくという過程を経る。

これがイギリスの場合には、学びや行動をする前に、なぜこれが自分にとって必要なのか、大事なのかを理解してから取り組むように見えた。これはおそらく歴史や文化の違いであり、どちらが良い悪いといった議論はナンセンスだと思うが、イギリスで感じたのは、彼らは上から言われたからただ従うのではなく、自分が納得してから取り組むということが子ども時代から刷り込まれている。

一九八〇年、東西冷戦の時代、ソ連（当時）のアフガニスタン侵攻によってアメリカ、日本を含む多くの西側諸国はモスクワ五輪をボイコットした。すでに代表選手として決まっていた人たちが、涙で抗議していた姿は目に焼き付いている。抗議はしても最終的には「国の決定に従わざるを得ない」という印象だったが、後にイギリスな

ど数カ国の選手が、国の代表ではなく個人の資格で参加していた事実を知って驚いた。日本選手は個人で参加する方法があるなど思いもしなかったはずである。

先生、親、目上の人、国が言うことは正しい、この人が言うのだからしかたがないという思考が、私たち日本人には観念的にあり、上の者も「下の者は反発しない」と高をくくっているところがある。二〇一二年のロンドン五輪、女子ナショナルチームにおけるコーチの暴力問題は、選手の自律と自立を踏みにじるこうした「指導」のあり方への告発だった。

私を質問攻めにしたイギリスの子どもたちは、私を尊敬していないわけでも信用していないわけでもない。そして、彼らの疑問が、「知っている」と決めつけていたことについて、改めて考える気づきとなった。先生！と呼ばれたから先生なのではなく、子どもたちの信頼を勝ち得た時に本当の意味で彼らに影響を与えることができ、彼らの先生になれるのだと感じた一年間だった。

私にとって先生とは、単なる知識や技術ではなく、物事の見方、考え方を教えてくれた人である。月日が経っても先生を思い出すのは、何かを判断する物差しが「先生の教え」にあり、私の原点となっているからだろう。柔道の試合で学んだのは、技を仕掛けて失敗した時の後悔よりも、負けるのを怖がって技を仕掛けることができなかった後悔の方が何十倍も大きいということだ。試合場に立てば誰も助けてくれないが、いつも背中を押してくれる先生の手を感じることができた。

人間は弱いので何をするにも迷うことの連続だが、挑戦の気持ちを持ってした決断を評価してくれる人がいれば、迷いを断ち切ることができる。どんなに偉大な人間でも間違いを犯すし、誤った判断をすることもある。だからこそ、背中を押してくれる存在が必要だ。自分が先生と呼ばれる立場になって、「私は教え子の背中を押してあげているだろうか」と時々思い出し、そうでありたいと強く願う。

イギリスを含めて海外での経験が、指導の在り方、教え方にベストはないという戒めになっている。ロジェ・ルメール（元フランス代表サッカー監督）の「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない」という言葉は、すべての先生、指導者が噛みしめるべき言葉だ。

子どもたちは違う環境に生まれ、育ち、価値観も考え方も自分と違うのが当たり前だ。この子には成功した教え方が、違う子にも当てはまるとは限らない。しかし、だ

からこそ教えることは楽しいし、無限の可能性がある。先生は人の能力を引き出し、生かすのが仕事だが、自分も彼らに伸ばしてもらい、生かされていることを忘れてはならない。

出典：山口 香「柔道とは？」（池上 彰編『先生！』2013年，岩波新書）

pp. 69-73（設問の都合により本文の一部を改変している）

（問1）下線部「違い」とは，具体的にはどのようなものか。85字以上110字以内で説明しなさい。

（問2）本文中で述べられている，日本とイギリスの「学ぶということ，修得していくプロセス」について，あなたの考える両者の長所を述べ，教育者として，それらをどのように融合させていきたいか，300字以上400字以内で具体的に答えなさい。